

# 中高年知的障害者と高齢の親の同居家族に対する相談支援 高齢福祉分野の相談援助職に対するインタビュー調査から

植戸 貴子

## Social Work with Families of Middle to Old Aged Persons with Intellectual Disability and Their Elderly Parents Who Are Living Together : Focus Group Interviews with Social Workers in the Field of Elderly Welfare.

Takako Ueto

### 要 旨

中高年となって機能低下が起こってきた知的障害者と、ケアを担ってきた高齢の親の同居家族において、様々な生活課題が生じている。親が病気や認知症になって子のケア機能が十分に果たせなくなっても、親に代わってケアを提供する体制が整わないまま親子の生活が行き詰ったり、地域から孤立したりしているケースが報告されている。このような状況に対しては、知的障害者本人と親のそれぞれに対するサービスや支援を提供するだけでなく、障害福祉分野と高齢福祉分野が連携・協働しながら、親子を一体的に支えていくことが求められる。本研究では、高齢福祉分野の相談援助職に対するフォーカスグループインタビューによって、中高年知的障害者と高齢の親の同居家族に対する相談支援の現状と課題、障害分野と高齢分野の連携・協働の現状と課題を探った。語りを分析した結果、知的障害者本人、親、他の家族メンバーがそれぞれに生活課題を抱えており、多様な関係機関が親子に関わっているが、障害分野と高齢分野の連携が必ずしもうまくいっていないケースがあり、相談援助職が障害福祉と介護保険の制度の壁に苦慮している現状が明らかとなった。

### I. はじめに

社会の高齢化が急速に進んできているが、知的障害者においても同様に高齢化の現象が起こっている。かつて、知的障害者は概して短命であると言われていたが、医療の発達や生活の質の向上などを背景に知的障害者の寿命も延び、中年期・高齢期を迎えた知的障害者の生活ニーズや支援が、

実践面でも研究面でも課題として取り上げられることが増えてきた。また、知的障害者の多くは成人後も親との同居を続け、高齢になった親が主たるケアの担い手であり続けるというのが決して珍しくない。知的障害者は一般人口に比べて加齢に伴う機能低下が早く始まるとも言われており、中高年となって機能低下が起こってきた知的障害者と、ケアを担ってきた高齢の親の同居生活においては、親によるケアに困難が生じてくることが容

易に想像できる。

障害者福祉の近年の動向に目を転じると、「入所施設から地域生活へ」という地域生活移行が政策面でも実践面でも進んできており、入所施設の定員数も削減の方向で動いている。かつては「親によるケアが難しくなったら、知的障害者本人は入所施設に入る」と考えられてきたが、今日では、親によるケアが限界に達しても、入所施設が親に代わる「受け皿」になり得ない状況も出てきている。

実際に、親が病気や認知症になって子のケア機能が十分に果たせなくなっても、親に代わってケアを提供する体制が整わないまま親子の生活が行き詰まったり、地域から孤立したりしているケースが数多く報告されている。このような状況は、知的障害者本人と親だけでなく、障害者福祉関係者・高齢者福祉関係者や地域社会にとっても、喫緊の課題と言える。そして、「中高年知的障害者と高齢の親の同居家族」への生活支援や相談支援を考える際には、知的障害者本人と親のそれぞれのニーズに応えることのみならず、「親子として」また「家族として」という視点からの支援が重要となる。知的障害福祉分野と高齢福祉分野が連携・協働しながら、親子を一体的に支えていくことが求められるのである。しかし、このような連携についての研究はまだ十分に行われていないため、その連携の現状と課題を明らかにしていくことが

必要である。

以上のような問題意識から、すでに筆者は障害者相談支援従事者を対象としたインタビュー調査を実施し、中高年知的障害者と高齢の親の同居家族に対する相談支援の現状と課題について、特に高齢福祉分野との連携の現状と課題を探ってきた(植戸 2018)。そこで本研究では、高齢福祉分野の相談援助職を対象としたインタビュー調査を実施し、高齢福祉分野から見た現状と課題を考察していく。

## II. 問題の背景と先行研究

人口の高齢化に伴って、知的障害者に関しても高齢化が顕著になってきている。厚生労働省の「平成28年生活のしづらさなどに関する調査」によれば、2016（平成28）年の在宅知的障害者の高齢化率（65歳以上の占める割合）は15.5%となっており、前回の調査（平成23年）の9.3%と比較すると、わずか5年間で6.2ポイントも上がっている。同調査における在宅身体障害者の高齢化率は、平成23年調査では68.7%であったものが、平成28年調査では72.6%となり、3.9ポイントの上昇である。また、2014（平成26）年の「患者調査」（厚生労働省）によれば、外来の精神障害者の高齢化率は36.7%で、これも2011（平成23）年の33.9%から3年間で2.8ポイント上がっている。一方で、総人口の高齢化率を見ると、2010（平成22）年では

表1：高齢化率の推移：3 障害及び人口全体の比較

	2011（平成23）年	2016（平成28）年	上昇幅
在宅知的障害者	9.3%	15.5%	6.2ポイント↑
在宅身体障害者	68.7%	72.6%	3.9ポイント↑
	2011（平成23）年	2014（平成26）年	
外来精神障害者	33.9%	36.7%	2.8ポイント↑
	2010（平成22）年	2015（平成27）年	
人口全体	23.0%	26.6%	3.6ポイント↑

23.0%であったものが、5年後の2015（平成27）年には26.6%となり、3.6ポイントの上昇となっている（表1）。これまで知的障害者は短命の傾向があると考えられてきており、人口全体や他の障害者と比較しても、高齢化率はかなり低いとされてきた。しかし、近年の高齢化率の上昇幅を見ると、知的障害者はかなりのスピードで高齢化が進んでいることが分かる。調査の方法や実施時期が異なるため単純な比較はできないが、知的障害福祉分野において高齢化問題が注目を集めている背景には、このような現状があると言える。

また、知的障害者は他の障害者や一般成人と比較しても、自分の親との同居率が高いことが分かっている。前述の「平成28年生活のしづらさなどに関する調査」によれば、2016（平成28）年の65歳未満の知的障害者のうち、「親と暮らしている」人が92.0%であるのに対して、身体障害者の場合は48.6%、精神障害者においては67.8%となっている。さらに「第7回世帯動態調査」（国立社会保障・人口問題研究所 2016）を見ると、20歳以上の親との同居率（「両親と同居」「父親と同居」「母親と同居」の合計）は、22.2%である。年齢の区分方法が異なるため、正確な比較はできないが、知的障害者においては一般人口や他の障害者と比べても、圧倒的多数の人が親と同居していることが分かる。

このようなことから、知的障害者は成人後も親と同居し、親が継続的にケア役割を果たしていることが推測できる。そして近年は、知的障害者及びその親の高齢化について、また親によるケアに伴う課題についての研究も多くみられるようになってきている。例えば、植戸（2017）は、知的障害者及び親の高齢化の現状を扱った先行研究をレビューし、親によるケアの現状と生活課題を整理している。主な先行研究としては、知的障害者

の高齢化が早く進むという問題や加齢に伴う疾患・機能低下を指摘した研究（石渡 2000、植戸 2010）、ケア役割を果たしてきた親の介護負担・疾患・経済的問題と「老障介護」に注目した研究（高林 2013）、親が抱く子の将来への不安や迷いについて言及した研究（三原 2007、植戸 2015）などがある。また、高齢になった親を知的障害者がケアしている「障老介護」という新たな問題（田村 2007）、知的障害者と家族の孤立（井土 2013）や、将来を悲観した親による知的障害者の殺害や心中の事件（夏堀 2007）について警鐘を鳴らす研究も出てきている。知的障害者の高齢化問題はこれまであまり議論の対象とならなかったが（谷口 2014）、近年ようやく、知的障害者と高齢の親を巡る課題が取り上げられるようになってきた。

さらに、知的障害者や高齢の親の相談支援実践の現場の課題についても、少しずつ研究が行われるようになっており、介護支援専門員の支援事例を紹介した研究（上原 2013、2014）、地域包括支援センターの社会福祉士の支援事例を取り上げた研究（辻村 2015）などがある。これらの先行研究を受けて、筆者は中高年知的障害者と高齢の親の同居家族への相談支援の現状と課題を探る目的で、障害者相談支援事業所へのインタビュー調査を実施し、障害者相談支援事業所と地域包括支援センターや居宅介護支援事業所の相談機関・相談援助職による連携について考察した（植戸 2017）。

以上のような先行研究レビューやインタビュー調査を踏まえて、本研究では「中高年知的障害者と高齢の親の同居家族への相談支援」の現状・課題、及び障害福祉分野と高齢福祉分野の連携のあり方について、高齢福祉分野の視点から探っていく。

### Ⅲ. 研究方法

#### (1) 研究の視点・目的

先述のように、知的障害者本人及び親の高齢化が進むことによって、中高年知的障害者と高齢の親が同居する家族において、親によるケアの行き詰まり、親子の生活の質の低下、親子共倒れ、親子の孤立などのケースが報告されるようになってきている。障害者相談支援事業所においては、知的障害者の相談支援を進める中で、同居する親自身の医療・福祉・介護のニーズに気づき、親の機能低下・病気・認知症の問題や入院・手術といった事態への対応に迫られることがある。一方で、地域包括支援センターや居宅介護支援事業所などにおいては、高齢者の相談支援に携わる中で、同居している知的障害のある成人子の存在を知り、知的障害者と関わりながら支援につなぐケースも出てきている(植戸 2017)。いずれの場合も、知的障害者本人及び親のそれぞれに対して必要なサービスや支援を提供し、両分野の相談援助職が互いに連絡を取り合ったり協議したりしながら、親子の生活を何とか支えようとしていると推測できる。そこで本研究では、中高年知的障害者と高齢の親の同居家族への相談支援と連携に焦点を当てて、高齢分野の相談援助職を対象としたフォーカス・グループ・インタビュー調査を実施した。

#### (2) フォーカス・グループ・インタビュー調査の概要

2017年9月と2018年3月に、A県内の地域包括支援センター及び居宅介護支援事業所の相談援助職を対象に、フォーカス・グループ・インタビュー(以下、FGI)を行った。個別インタビューではなく FGI の手法を用いた理由は、同じような立場の相談援助職が1つの話題について各自の経験や思いを語る中で、他の参加者の発言に触発され

て、語りに深みや広がりが出てくることが期待されたからである。1回目の調査には3名、2回目の調査には3名が参加してくれたが、2回とも参加した人が1名いたため、実質的な調査協力者は5名であった。FGIの実施場所はA県内の福祉センターの会議室(1回目と2回目は別の場所)であった。

質問項目は、①中高年知的障害者と高齢の親の同居家族への相談支援の現状と課題、②中高年知的障害者と高齢の親の同居家族への相談支援における障害福祉分野と高齢福祉分野の協力・連携の現状と課題(これまでに取り組んできたことや、取り組めていないが必要と考えていることなど)の2項目とした。

FGIに先立って、「神戸女子大学人間を対象とする研究倫理委員会」に研究計画書を添えて審査を申請し、委員会の承認を得た。その上で、調査協力者に対して、調査協力依頼状、「説明及び同意書」(調査の概要・意義・目的・方法・倫理的配慮等に関して説明し、同意の署名をする欄を設けたもの)を事前に送付して内容を確認してもらった。

具体的な倫理的配慮は、調査協力は各自の自由意思に基づくものであり、協力しないことで不利益は生じないこと、会話の内容をICレコーダーに録音すること、録音データは調査者のみが聞くこと、録音データ及び文字化したデータは厳重に保管すること、各事業所や個人が特定されることができないようにプライバシー保護に十分注意することなどであり、これらについて口頭及び文書で説明して調査協力の同意を得た。また、研究成果を学会や論文の形で公表することについても承諾を得た。

FGIの当日には、調査協力者に各自のプロフィールに関する簡単なアンケート調査に記入し

中高年知的障害者と高齢の親の同居家族に対する相談支援 高齢福祉分野の相談援助職に対するインタビュー調査から  
 てもらった。調査協力者5名のプロフィールは以下  
 全員が介護支援専門員資格を持ち、それ以外に  
 下の通りである（表2）。 も何らかの専門職資格を持っていた。障害分野の

表2：調査協力者（5名）のプロフィール

性別	男性	女性				
	1名	4名				
年齢	20代	30代	40代	50代	60代	
	0名	1名	2名	1名	1名	
専門職資格 (複数)	介護支援専門員	社会福祉士	精神保健福祉士	介護福祉士	看護師	社会福祉主事
	5名	4名	1名	2名	1名	1名
相談業務 経験年数 (複数)	地域包括支援 センター	居宅介護支援 事業所	障害者相談支 援事業所	その他		
	最小：0年 最大：9年 平均：5.6年	最小：0年 最大：13年 平均：5.4年	経験者なし	最小：0年 最大：5年 平均：1.3年		

相談業務を経験したことのある人はいなかったが、高齢分野における相談業務の経験は豊富な人たちであった。

2回のFGIに要した時間はいずれも約90分であった。ICレコーダーに録音した会話を聞いて逐語録を作成し、その逐語録を個々の調査協力者に送付し、自分の発言内容について確認してもらった。各調査協力者から返送されてきた修正部分を踏まえて、逐語録を完成させた。

### (3) FGIのデータ分析法

(2)で述べた方法で作成した逐語録は、佐藤(2011)による質的データ分析法を用いて分析した。相談援助職が親子の生活状況をどのように把握しているか、具体的にどのような支援や介入を行っているか、相談支援や連携の課題やあり方について、どのような認識や思いを持っているかなどに注目しながら、発言の意味を解釈した。重要と思われる箇所を抽出してオープン・コーディングを行い、さらに焦点的コーディングによってよ

り抽象的な概念にまとめ上げ、最終的に大きなカテゴリーに分類することができた。

### IV. 調査の結果：相談援助職の語りの分析

相談援助職の語りを分析・整理した結果、大きく4つのカテゴリーにまとめることができた。①知的障害者本人・家族等に関する事柄、②関係機関に関する事柄、③社会資源等に関する事柄、④相談機関及び相談援助職に関する事柄、の4つである（表3）。

表3：相談援助職の語り

(SS:ショートステイ/GH:グループホーム/HH:ホームヘルプ/DS:デイサービス/CM:介護支援専門員/MSW:医療ソーシャルワーカー)

(1) 本人・家族等に関する事柄

		語りの具体例
本人	状況	<p><u>障害状況・健康状態</u>：視覚・聴覚との重複障害／問題行動／行動障害／容体悪化／要介護・寝たきり・関節疾患／向精神薬を服用／機能低下／判断能力がほとんどない</p> <p><u>コミュニケーション</u>：手話と筆談で簡単なやりとり／コミュニケーションに課題</p> <p><u>生活状況</u>：障害HH利用／訪問リハビリ利用／機嫌よく通所している／施設で機嫌よく生活している／親から独立してGH／GHで楽しく生活している／自宅で自由な夜型生活をしている／親の保護が切れて要支援状態／障害福祉から介護保険へ移行／うまく暮らせない／最低限度の生活をしている／障害認定されていない／手帳・障害年金がない／サービス利用なし／日中活動に行っていない／離職してニートの状態／セクハラを受けて通所利用を中止／家計を管理している／困り感がない</p> <p><u>生活課題</u>：いじめを経験／アルコール問題／借家の保証人になる人がいない／人慣れが必要／高齢DSに馴染めない／介護保険サービスへの切り替えが困難</p> <p><u>ストレングス</u>：若くて能力がある／結構独り立ちしている／HH支援で家事を習得／母をあまり必要としていない／親元を離れて友達ができる</p>
	行動・対応	<p><u>自分の考えで動く</u>：入所施設から帰省してそのまま退所／自由で気ままな生活／生活保護費を菓子代に使う</p> <p><u>支援を求める</u>：経済的支援は積極的に受け入れる</p> <p><u>依存する</u>：母親に甘える／親がいると自分でもできることもしない</p> <p><u>攻撃的な行動</u>：母に暴力を振るう</p>
	思い	<p><u>自分自身についての思い</u>：自由にお金が使えないストレス</p> <p><u>親についての思い</u>：親と離れた楽しさと寂しさの両方</p>
親	状況	<p><u>障害・健康状態</u>：転倒⇒骨折⇒入院／認知症・ガン⇒死亡／体調を崩して入院／長期入院／退院直前に死亡／機能低下／要介護から要支援に改善／ゆっくり成長してきたような印象</p> <p><u>子のケア</u>：子の世話については支援が必要／ケアを抱え込んでいる／子の障害に気づいていない／子の話を真に理解できていない／子の障害を放置してきた</p> <p><u>生活状況</u>：一人親／二重介護からネグレクト／自分のことで必死／自分だけの買い物は自分でできる／高齢で働けなくなる／後見人がつく状態／幼さの残る発言／就労できなかった／社会参加なし／年金が少ない／安定収入がない／老齢年金対象年齢ではない</p> <p><u>サービス利用</u>：障害サービス利用⇒介護保険サービス利用⇒利用中止／HH・DS・SSを利用／子が入所するとサービスが不要になる／制度を知らない</p> <p><u>生活課題</u>：お酒の問題／お金の使い方／仕事が続かぬ／親族に騙されていることに気づかない</p>
	行動・対応	<p><u>自分で対処する</u>：支援を受け付けない（地域包括支援センターの場合）／助言を拒否／自分ができるうちは頑張る／子を手放さない／相談の意思がなく支援を受入れない／自ら頼みに来ない／元気になると支援を拒否する</p> <p><u>サービス利用</u>：子のサービス利用を拒否／子のDS利用を中止／子の入院を拒否／子に手帳を取らせない／制度活用できない／自分の介護保険サービスを子の支援のために使いたいと申し出る</p> <p><u>親同士の関わり</u>：親同士が連帯／親同士の交流のある人となない人がいる／親の会に未加入／繋がりを持たない若い親がいる</p>

		語りの具体例
親 (つづき)	行動・対応 (つづき)	<p><u>支援を求める・受け入れる</u>：自分自身の入院を機に子を託す発言／収入確保支援をきっかけに他の支援を受入れる／相談の意思があると支援を受入れる／民生委員に相談する／気落ちしている時は支援者を頼る／しんどくなると子を手放す／子からの暴力・虐待を告白する</p> <p><u>関わりを避ける</u>：まともに話してくれない／子の引きこもりを隠す／子からの暴力を隠す</p> <p><u>将来への準備</u>：自分の死後を前向きに把握しない／何も準備をしていない／子の将来を考えている人と考えていない人がいる／子にお金を残す／親の会の会員は前向き／親の会に入ると将来を見据えられる</p> <p><u>子への対応</u>：子に家事をさせない／子の言いなり／子に逆らえない／子の帰省によって世話を再開／閉じこもりの息子を自慢</p>
	思い・考え	<p><u>自分自身の状況について</u>：自分ではできると思う／問題なくやれていると思う／支援を望んでいない／高齢になってしんどい／一人でやっていけない／現状に困っている／家を離れたくない／自分のことを考えてよいと思える</p> <p><u>子について</u>：子の障害を受入れたくない／障害とラベリングされたくない／「この子はできない」という思い／子が可哀想／子がいないと寂しい／子を手放せない／子と別れたくない／子が先に死ぬと思っている／子を当てにする気持ち／自分がいなくても子は大丈夫と思う／子からの暴力を恐れる</p> <p><u>子のケアについて</u>：母親の役割を果たしたい／世話をする対象が必要</p> <p><u>親族について</u>：親族に期待する</p> <p><u>サービスについて</u>：HHに頼るしかない／特定のSS事業所にこだわる／事業所に全面的に依存／事業所を裏切ることができないと思う／CMは子を奪う存在として敵視する／子のHHを疑う気持ち</p> <p><u>将来について</u>：子が働かなくてもお金に困らないという思い</p> <p><u>その他</u>：親の会は選択肢の一つに過ぎない／親の会はメリットがない／(居宅介護支援事業所が関わる親は) 割と諦めている</p>
家族	状況	<p><u>家族メンバーの状況</u>：弟が就労／弟が独立して家を離れる／弟が鬱で閉じこもり／きょうだいが高齢／祖母と二人暮らし／祖母が認知症／祖母が緊急搬送⇒入院／親子で同様の傾向(理解力不足)</p> <p><u>居住環境</u>：ボロボロの借家／家の状態がひどい／家の片づけができていない</p> <p><u>経済的状況</u>：生活が苦しい／非常に困窮／親の国民年金だけ／祖父の年金が少ない／生活保護受給／孫の手当や祖父の年金に依存／収入が途絶えて困窮／父の死後に生活困窮／介護保険自己負担が払えない／お金を借りても返せない</p> <p><u>生活上の課題</u>：虐待を通報される／(将来のことについて周囲から) 言われないと気づかない／親族の不正を見抜く力がない／(自分たちの問題について) 自覚が欠如している</p> <p><u>複数の多様なニーズ</u>：三世代で困っている</p> <p><u>孤立・閉じた状態</u>：親族がいない／支援者がいない／キーパーソンがいない／抱え込むしかない／相談先がない／経済的支援事業のことを知らない</p> <p><u>親の不在による家族環境の変化</u>：父の死後、一人暮らし／最終的に施設入所</p>
	親子関係	<p><u>母子密着</u>：共依存／母娘はべったり／二個一で何とかやっている／お互いに残されると困る／収入面でも離れたい</p> <p><u>役割の逆転</u>：母親が(家庭の)メインから子がメインへ移行</p>
	行動・対応	<p><u>知的障害者本人への対応</u>：甘やかす／抱え込む／母の死を知らせない</p> <p><u>支援を求める</u>：母子を一緒にさせてほしいと依頼してくる</p> <p><u>その他</u>：支援者の思うように動いてくれない／自分たちにメリットのあることしか受入れない／サービス利用を控える／近所から借金をする</p>

		語りの具体例
家族 (つづき)	思い・考え	知的障害者本人について：本人が先に死ぬと思っている／無理に働かせたくない 母子関係について：「母子は二個一」と感じている 親族について：騙されているとは思わなかった（不信感） 将来について：入所を想定している／「将来について誰も言ってくれなかった」という思い／将来について真剣に考える
親族	状況	親族の援助困難：親族は期待できない存在 問題のある親族：訪問時にお金を盗っていく

(2) 関係機関に関する事柄

		語りの具体例
関係機関	状況・対応	高齢関係事業所：DSが虐待に気づいてくれた／障害者の対応・受け入れができない 障害関係事業所：HH事業所が制度を悪用する／親子同一HH事業所がサービス提供の不正／架空請求／事業所都合のケアプランを作る／ただの親切でやっている／ソーシャルワークの意識がない／キーマンになっている／家族となれ合い／事業所によって関わり度が違う／HHが知的障害者本人をSSまで送っていく／ほぼ終日HHが入っている／買い物を制限する（金銭管理の目的で）／HHの調整をしてくれる／親からの相談を地域包括支援センターに振ってくるだけ／介護保険サービスについて要求してくる 医療機関：MSWが介護保険の申請をする 教育・療育機関：制度が周知できていない／親への支援ができていない／障害の親子支援を見通せていない その他：繋いだ先の動きが遅い／支援者は目の前のことで精一杯／昔の支援者がサービス利用や金銭管理を支援

(3) 社会資源に関する事柄

		語りの具体例
社会資源	状況	障害関係：支援費制度の時代はサービスが自由に使えた／障害者相談支援事業の体制ができる前は支援の責任者が不明だった／入所中は在宅サービスが使えない 障害福祉と高齢福祉の兼ね合い：同一事業所が障害福祉と介護保険の両方のサービスを提供／障害福祉と介護保険のDSを併設しているところがない／障害福祉と介護保険の制度の壁／65歳で突然介護保険に移行 社会福祉協議会：経済的支援事業を実施 その他の地域資源：一人暮らしの住まいの確保が難しい

(4) 地域包括支援センター・相談援助職に関する事柄

		具体例
地域包括支援センター	対応	現状把握：障害の孫の存在を把握している／家の状況を把握している 虐待対応：ネグレクトに介入／虐待通報を受けて家庭訪問／分離ではなく見守りの判断 知的障害者本人に対して：障害の子の支援もする／本人を前に皆で考える／本人の理解を促す／在宅生活継続のための支援 家族に対して：家族全体を見る／高齢者以外の部分も支援する 支援体制に関して：市の総合相談窓口繋ぐ／いろんな立場の人に入ってもらう／まずテーブルに出す／地域の理解を求める

		具体例
地域包括支援センター (つづき)	対応 (つづき)	<p><u>関係づくり</u>：市にお伺いを立てる／普段からウィンウィンの関係づくりをする／行政担当者交代の度に一から関係づくり</p> <p><u>その他</u>：枠を超えた動きをする／高齢支援者の懇話会に障害相談員を呼ぶ／障害相談員にも研修の門戸を開く</p>
	他機関等との連携	<p><u>障害関係機関</u>：障害相談員から頻繁に現状報告／子の支援者と頻繁に情報共有／障害相談員と協議／通所施設やHH事業所と協議／HH事業所に連絡・訪問・問い合わせ</p> <p><u>高齢関係機関</u>：不慣れな高齢HH事業所をフォローする／支援の目的をHHに伝える／CMと一緒に動く</p> <p><u>役所</u>：生活保護担当と障害福祉担当が交渉して判断／障害福祉担当や引きこもり担当に入ってもらい／市の福祉担当と協議</p> <p><u>地域住民</u>：近隣との話し合いを持つ</p> <p><u>連携全般</u>：ケア会議を開く・重ねる／皆の合意で決める／支援者同士の連携／一緒に考える／目的を決めて会議をする／課題を次に繋ぐ／必要に応じて会議の参加者を加える／課題分析会議を持つ／地域の課題を考える／チームで支援の道筋を作る／連携がうまく行っていない／お互いに「誰かがする」と思ってしまう</p>
	相談経路	<p><u>民生委員</u>から：親⇒民生委員⇒地域包括支援センター</p> <p><u>病院</u>から：気になることについて連絡・問い合わせ／MSWから障害の子の情報が入る／地域連携室⇒役所の障害担当者⇒総合相談窓口</p> <p><u>障害者福祉施設</u>から：家族の変化についての情報が入る</p> <p><u>役所</u>から：障害担当者からは親の情報は入らない</p> <p><u>地域包括支援センター</u>から：地域包括支援センター⇒居宅介護支援事業所</p>
相談援助職	状況・対応・支援	<p><u>知的障害者本人への支援</u>：将来の住まいについて話をする／障害DSで社会参加してもらい／障害HHを入れる／障害通所施設で継続的に受け入れてもらう／障害者手帳の取得支援／手話通訳を導入／家事スキルの訓練／母親の入院に伴って障害HHの調整／訪問を増やす／母親が倒れて初めて支援が入る</p> <p><u>親への支援</u>：子の入院を勧める／先のことを考えるよう母を説得／母のHH利用を援助／子の障害福祉サービス利用を勧める／昔の支援者と母親を繋ぐ／収入確保・経済的支援の情報提供／「うちの子はできない」と言う母に「本人は一人の時はできる」に反論する／親の障害年金受給を検討／母親を(子の暴力から)SSに避難させる</p> <p><u>親子への支援</u>：家庭訪問／親子に成年後見人をつける／親子それぞれに支援者をつける／親子の介護保険HHが交代で入る／母子両方の支援をミックスで賄う／親子二個一で支える／母子が同一事業所に通所／母子それぞれが施設入所</p> <p><u>家族への支援</u>：収入面と生活面の両方の支援／祖父の支援のために子・孫を支援／貸付金・福祉サービス利用援助事業・生活保護を導入／社会福祉協議会の経済的支援を活用／金銭給付でしのぐ／きょうだいに将来について投げかけ／祖母にHHを導入／他の家族に事情を説明</p> <p><u>サービス調整</u>：福祉サービス利用援助事業につなぐ／昔の支援者に障害福祉サービスの手配を依頼／事業所を変える／HH派遣を要請する</p> <p><u>他機関への働きかけ</u>：行政と交渉する／障害分野の支援者を会議に招く</p> <p><u>地域への働きかけ</u>：地域の理解を得る</p> <p><u>支援の体制</u>：居宅介護支援事業所から地域包括支援センターにケースを移管／支援者を増やす／一緒に考える／支援者が入ることで事態が動く</p> <p><u>その他</u>：親族の代わりに動ける人を探す／不意打ち訪問でHHの不正を見抜く／障害のことも勉強して対応する／外部のスーパーバイザーに助言をもらう／抱え込む母親にはあまり出会ったことがない／子を手放さざるを得なくなった母親に出会う／障害相談員と話したことがなかった</p>

		具体例
相談援助職 (つづき)	思い・考え	<p><u>知的障害者本人について</u>：本人の将来の住まいの確保が大切／新しい人間関係を作ることが必要／本人がその気にならないと解決しない／本人が困っていないなくても働きかけが必要／本人は親の死を理解している／本人を一人にしておけない／障害の早期発見で本人の良い面が見つかる／周囲は本人の力を過小評価している／本人の適応能力の高さに驚いた／在宅生活を継続させてあげたい／障害が個性かのとらえ方が難しい／障害者に高齢福祉施設は馴染まない／親亡き後の本人の生活が心配／本人のお金を守らなければならない</p> <p><u>親について</u>：母親の考え方に疑問を抱く／母親の感覚が理解できない／親の考え方に世代の違いがある／親と周囲の間に認識のズレがある／親の言動に振り回される／母親の気持ちを引き出せなかった／親の言動でダメになる時の準備を考える／何とか本人を母親に託せる状態／親の支援だけなら楽／親の相互支援を支援することが必要</p> <p><u>親子関係について</u>：母子ともに元気なら離れることができる／親が要支援だが動けるという時が介入の好機／上手に母子分離するか無理に引き離すかのどちらか／親子を無理に引き離さなくてもよい／親子分離は流れに任せるのがよい／子は母との繋がりが強く父とは希薄</p> <p><u>家族・親族について</u>：きょうだいへの支援について後悔がある／きょうだい亡き後は親亡き後より大変／周囲が心配している／支援者が多いと家族はかえって混乱する／理解力の乏しい家族がいる／障害者の80・50問題は悲惨／親族間の信頼を壊すようなことは言いつけない</p> <p><u>サービス提供者について</u>：親子が同一事業所を利用することの功罪／訪問の度にHHの支援に疑問を感じる／HHの時間帯の家庭訪問は気兼ね／HHは個人プレイで信頼できない・要注意／HH教育が必要／HHが支援しすぎるのは良くない／根拠を持って支援できるHHは少ない</p> <p><u>役所について</u>：現場感覚が地域包括支援センターと異なる／市の窓口の対応の違いは大きい</p> <p><u>CMについて</u>：親しか見ていない</p> <p><u>障害相談員について</u>：障害者本人しか見ていない／動きが連携と言えるか疑問／気づきや動きが遅い／焦りが無い／支援をゆっくり考える傾向／関わるうちに障害相談員の考え方が理解できるようになった／親をしっかりと見ている（誤解している）／障害者本人の住まいの確保をしてほしい</p> <p><u>障害福祉と高齢福祉の兼ね合いについて</u>：障害相談員とCMの関係性は多様／障害相談員とCMに温度差がある／障害相談員とCM兼務の人は気づきが早い・親子両方を見ている／障害と高齢の支援者相互の理解が必要／障害と高齢の支援者がお互いに変わっていくべき</p> <p><u>地域について</u>：介護保険導入によって地域の繋がりが希薄化した／地域の見守りの復活は難しい／地域は大きな力を持っている／地域住民からの発信は重要</p> <p><u>経済的支援について</u>：収入確保の支援によって信頼が得られる／お金がなければサービスを進めても無意味／経済的自立の支援に対しては（本人・家族の）反応が良い／経済的支援は重要／経済的自立の支援についての知識は強み</p> <p><u>制度・仕組みについて</u>：小規模市では障害と高齢の両方に携われるメリットがある</p>

		具体例
相談援助職 (つづき)	思い・考え (つづき)	<p><u>支援の状況について</u>：支援者が入ることで事態が動く／障害福祉サービスを利用している人は支援しやすい／障害分野からの情報は難しい／近所から情報が来ると支援に入りやすい／日々の支援から見えてくるものがある／先を見据える支援ができていない／今のうちに何とかしなければならない／のんびりした言い方だと相手に通じない／焦りからケンカ腰になる／放ったらかしの支援者がいる／担当によって動きが違う／部署による温度差を感じる／今のうちに何とかしなければならない／地域包括支援センターは現場に入り込んで生活をよく見ている／親子のHHの分担には話し合いが必要／知的障害者本人より母親の意見を取り入れてしまう／地域理解がないと在宅生活は続かない／重層的関わりでうまくいく／徐々に介護保険に切り替えるのがよい／介護保険への移行の体制作りが重要</p> <p><u>支援のあり方</u>：支援者が将来について発信すべき／自分たちは旗振り役・緑の下の力持ち／皆が話し合うことが支援になる／支援者を増やすことが大切／一緒に考えることが大切／強制ではなく皆が納得できる形で解決する／善意だけの支援は良くない／人権擁護の視点で見る／意思決定支援が必要／日頃のコミュニケーションが大切／支援者が「良かった」と思える支援にする／世帯全体で見ることが必要／繋いだ後の連携が重要／相談に乗るだけでは不十分／親子の将来を早い段階から考えるべき／親子共倒れを防がなければならない／個別的な支援が必要／支援の振返りが大切／皆が主人公ととらえる／行政との関係を大切にする／縦割りでは共生社会は実現しない</p> <p><u>困難・悩み</u>：子の側に支援者がいない／(将来の)準備をしていない人の情報が入ってこない／1回の会議では解決しない／65歳を超えると介護保険に移行し障害相談員が切れてしまう／知的障害者本人の時間数だけでは不足／母子のサービスを合わせても支援が足りない／相談が上がってこないと動けない／支援のステージに上がる迄に時間がかかる／借家の場合は将来に不安が残る／支援者たちは毎日が必死／母親が倒れると焦りの気持ち／親の支援者は子へのアプローチが難しい／家事援助は親子で明確に区分できない／親子のHHの分担の擦り合わせが難しい／自らの力不足・対応を反省／本人と親の利益相反・ニーズの板挟み／自分には強制力がない／制度の狭間で動けない／障害分野と高齢分野の制度の壁を感じる／障害相談員や生活保護担当者に何とかしてほしい／支援について自問する／入所は誰が決めるのかという疑問／何をもって本人の納得と言えるのか疑問／部署が違うために自分たちで動けない苛立ち／分野外のことは行動を起こしにくい／閉鎖した家族への介入が難しい／網の目から落ちていくことが本当の問題</p> <p><u>その他</u>：親子の状態が心配／繋いだ後にうまくいくよう願っている</p>

(1) 知的障害者本人・家族等に関する事柄

1) 知的障害者本人に関する事柄

知的障害者本人の状況については、障害状況や健康状態に関する語りがあった。他の障害を併せ持っていたり、健康状態が悪く介護が必要な状態になっていたり、行動面や判断力に課題のある人がいることが分かった。コミュニケーションに関しても課題が指摘された。生活状況に関しては、ホームヘルプ・訪問リハビリテーション・通所施

設・グループホームなどを利用している人がいる一方で、仕事や通所施設を辞めた後に在宅生活を長く続けている人の存在も報告された。障害者手帳や障害年金がないなど、知的障害者として認識すらされていないと思われる人もいた。生活課題としては、いじめの経験やアルコール問題、高齢になって介護保険サービスに移行することに困難があることも指摘された。その一方で、本人の能力や親からの自立をストレンクスとして評価する

声も聞かれた。

本人の行動や対応としては、入所施設から帰省した後、そのまま施設に戻らずに自宅に留まり続けて結果的に退所するなど、周囲の思いとは異なる自分なりの考えに基づく行動や、親への依存・攻撃などが報告された一方で、経済的な支援に関しては積極的に受け入れる人もいることが分かった。

本人が抱いている思いとしては、自由にお金が使えないなどのストレスの他、親と離れることについて楽しさと寂しさの両方の気持ちを抱いているという発言もあった。

## 2) 親に関する事柄

親の状況として、障害や健康状態に関する懸念事項が報告された。機能低下が見られたり、ケガや病気で入院が必要となったり、結果的に親が亡くなるというケースがある一方で、時間の経過とともに心身の状態が改善して自立度が高まり、要介護認定が軽くなった親がいることも分かった。さらに、「ゆっくり成長してきた印象」と表現されるように、十分な理解力や生活力を備えていないと思われる親の存在も明らかとなった。子のケアに関しては、子の障害に気づいていない・理解できていない・放置してきたなど、適切な理解や対応ができていないと思われるケースや、ケアを抱え込んでいるケースなど、知的障害のある子のケアについて支援の必要な親がいることが明らかとなった。生活状況として、自分のことで精一杯、配偶者がおらず一人で子のケアを担っている、二重介護の状態に置かれているなど、ケアの負担を経験している様子が窺えた。親自身が就労できず安定収入を得てこなかった、年金収入がない／少ないなど、親のこれまでの暮らしぶりが現在の生活に影響を与えていると思える現状も見えてき

た。自身が障害福祉サービスや介護保険サービスを利用している親がおり、知的障害の子が施設入所して自分だけの生活になると、子のケア負担がなくなる分、サービスが不要になるケースもあった。また、制度を知らない親の存在も指摘されていた。生活課題としてはアルコール・金銭管理・安定的就労などの課題も見えてきた。

親の行動・対応としては、自ら支援を求めることなく子のケアを自分で担おうとしたり、支援や助言を拒否したりする親がいることが報告された。サービス利用に関しては、子に手帳を取らせない、子の入院やサービス利用を拒否するなど、制度活用に消極的な親がいるが、反対に親自身が利用している介護保険のサービスを子のために使いたいと申し出る親もいて、サービス利用を巡る親の対応はさまざまであることが分かった。親同士の関わりについては、親の会を通じた交流のある人と、親の会にも入らず孤立していると思われる親もいることが示唆された。そして、民生委員に相談したり、自身の入院を機に子を託したいと話したり、子からの暴力について支援者に告白するなど、支援を求める親がいる一方で、支援者とまともに話そうとせず、関わりを避ける親もいるようであった。さらに、将来への準備についても、親亡き後を前向きに考えて準備している人と、そうでない人がいるとのことであった。親の会に入ることによって将来を見据えられるという示唆に富んだ発言もあった。子への対応としては、子に家事をさせない、子の言いなり、子に逆らえないなど、あまり適切と思えない対応が見られることが分かった。

親が抱いている思いや考えのうち、自分自身については、「問題なくやれている」と感じ、支援を望んでいない親がいる一方で、「しんどい、やっていけない」などの困り感を抱いている親もいた。

知的障害のある子については、「障害を受入れたくない」、「この子はできない」、「可哀想」、「子からの暴力が怖い」などの否定的な思いがある一方で、「自分がいなくてもこの子は大丈夫」と子への信頼感を持つ親もいることが分かった。また、「子がいなくて寂しい」など、子と一緒にいたいという思いを抱いている親が多いことが示唆され、子のケアを母親の役割と感じ、世話の対象として子の存在を必要としている親もいることも窺えた。サービスに関してはホームヘルプやショートステイ事業所を頼りに思い、裏切れないとさえ思っている親がいる一方で、介護支援専門員やホームヘルパーに対してネガティブな思いを持っている親もいることが明らかになった。

### 3) 家族に関する事柄

家族の状況として、きょうだいが高齢・鬱状態、祖母が認知症・緊急搬送、親にも理解力不足の傾向があるなど、家族メンバーにもニーズがあることが窺えた。ボロボロの借家に住んでいる、家族の年金・手当に依存している、生活保護を受給している、介護保険自己負担が払えないなど、居住環境や経済状況の悪い家庭があることも分かった。さらに、虐待が疑われたり、自分たちの問題を自覚できていなかったり、頼れる親族や支援者が不在で孤立し、抱え込まざるを得なかったりしている様子も浮き彫りとなった。

親子関係については、知的障害者本人と母親との間に心理的に密着した関係があるだけでなく、収入面でも相互依存しており離れたい状態であることが言及されており、母親が高齢になって弱っていく中、母と子の役割が逆転しているケースも報告された。

家族の行動・対応として、まず知的障害者本人に対しては、甘やかしたり抱え込んだり、また「母

子と一緒にさせてほしい」など、他の家族も母子の親密な関係の維持を望んでいる様子が窺えた。その他、サービス利用や支援の受け入れに積極的ではなかったり、近所からの借金があったりして、支援者から見て関わりが難しいと感じられるような家族の存在が報告された。

家族の思いや考えとしては、知的障害者本人に対して「先に死ぬ」「無理に働かせたくない」と思っている家族がいることが分かった。将来についての家族の思いは、入所を想定している、あまり考えていなかった、真剣に考えているなど、多様なようであった。

### 4) 他の親族に関する事柄

他の親族の状況として、訪問時にお金を盗っていくなど、知的障害者本人や親、支援者にとっても、信頼できる存在と言えない親族がいることが分かった。

### (2) 関係機関に関する事柄

関係機関の状況や対応として、まず高齢関係事業所については、デイサービスが虐待に気づいてくれるという状況がある反面、障害者への対応や受け入れに問題があることが指摘された。障害関係の事業所については多くの発言があり、特に批判的な発言が目立った。例えば、ホームヘルプ事業所において不正が行われている、家族となれ合いになっている、ただの親切でやっていてソーシャルワークの意識がない、親からの相談を地域包括支援センターに振ってくるだけ、介護保険サービスについて要求してくるといったものである。それに対して、ホームヘルパーの調整をしてくれる、ショートステイへの送迎を担ってくれるといった肯定的な発言も若干見られた。さらに、医療機関が介護保険の申請をしてくれる一方で、

教育・療育関係の機関では制度の知識や親子の支援の認識が欠けているという指摘もあった。関係機関と一口に言っても、状況は実に様々であることが窺える。

### (3) 社会資源に関する事柄

社会資源の状況として、障害関係では障害者相談支援体制ができたことで支援の要となる機関が明確になったことが評価されていたが、入所施設に在籍していると一時的に在宅サービスが必要になっても利用することができないという課題も見えてきた。障害福祉と高齢福祉の兼ね合いとしては、両方のサービスを提供している事業所があることのメリットが述べられていたが、やはり両制度の壁があり、特に65歳になると障害福祉から介護保険に移行するという制度の難しさを指摘する声が聞かれた。さらに、一人暮らしの場合、住まいの確保が難しいという問題があることが明らかとなった。

### (4) 相談機関及び相談援助職に関する事柄

#### 1) 地域包括支援センターに関する事柄

地域包括支援センターの対応状況については、多くの発言があった。家の状況や知的障害のある子や孫の存在を把握しており、さらに虐待通報を受けて家庭訪問し、見守りや介入をしていると語られた。知的障害者本人に対しては、理解を促したり本人を交えた話し合いをしたりして、本人の在宅生活継続に向けた支援をしているとのことであった。また高齢者以外の家族メンバーも含めた家族全体を見ようとしているとも述べられていた。さらに、行政につないだり、地域住民も含めていろいろな立場の人に関わってもらったりして、支援体制を作ろうとしていることが窺えた。一方で、頻繁に担当者が交代する行政に対しては、

一からの関係づくりを心掛けたり、お伺いを立てたりとするなど、普段から関係づくりに腐心している様子が語られていた。そして、高齢分野の関係者だけに留まらず、障害相談員を会合や研修に招くなど、枠を超えた動きを心がけているようであった。

他機関等との連携についても、さまざまな発言が聞かれた。障害関係の機関との連携として、障害相談員との連絡・協議の他、通所施設やヘルパー事業所との連絡・協議も行われていた。高齢関係では、ホームヘルパーやヘルパー事業所に対するフォローの他、居宅介護支援事業所の介護支援専門員と一緒に動くということもしていた。役所との連携では、生活保護担当、障害福祉担当、引きこもり担当などとの交渉や協議が行われ、地域住民とも話し合いを持っていた。連携全般に関しては、会議などで話し合い、一緒に考え地域の課題を考えるなど、チームで取り組もうとしているようであったが、連携がうまく行っていないという声もあった。

相談の経路としては、民生委員から、病院から、障害者福祉施設から相談が入ってくるとのことであったが、役所の障害担当者からは情報が入ってこないという発言もあった。そして、地域包括支援センターから居宅介護支援事業所に相談を繋ぐこともしていた。

#### 2) 相談援助職に関する事柄

相談援助職が置かれている状況や行っている対応・支援についてもさまざまな言及があった。知的障害者本人への支援としては、障害者手帳取得の支援、手話通訳の導入、ホームヘルプサービスの導入や調整など、制度や支援に繋ぐことに加えて、訪問をしたり将来の住まいについて話したりするなどの相談支援も行っていた。親に対しては、

子による暴力から母親を守る介入を行ったり、親自身のサービス利用や子のサービス利用・入院を勧めたり、経済的支援につながる情報提供をしたりといった支援が報告された。また、知的障害のある子の力を正当に評価するように母親に投げかけたり、将来について考えるように促したりして、母親の意識を変えるような働きかけも行っているようであった。親子に対する支援としては、家庭を訪問する、親子それぞれに支援者や後見人をつける、親と子の支援を交代で入れるなど、親子を一体的に支えられるように心がけている様子が窺えた。家族に対しても、収入面と生活面の支援を提供し、ある家族メンバーへの支援を通じて間接的に他の家族メンバーを支えるなど、多面的・総合的に家族を捉えようとしていることが分かった。特に経済的な支援に重きが置かれるケースが多いようであった。また、サービスの調整や他機関への働きかけも行われており、支援者を入れて一緒に考えることで問題を解決しようとしている様子が窺えた。その他、障害相談員と話したことがなかったという相談援助職がいた反面、障害のことも勉強して対応する、外部のスーパーバイザーに助言を求めるなど、自身の相談支援の質を高める努力をしている人もいた。

相談援助職が抱えている思いや考えについても、非常に多くの発言が得られた。まず、知的障害者本人については、「将来の住まいの確保が大切」、「新しい人間関係を作ることが必要」など本人のニーズに関するもの、「本人を一人にしておけない」、「親亡き後の生活が心配」など本人を気づかうもの、「周囲が本人の力を過小評価している」、「適応能力の高さに驚いた」など本人の力を高く評価するものなどがあり、「本人のお金を守らなければならない」、「本人が困ってなくても働きかけが必要」など、本人に対する支

援のあり方に関する発言もあった。親については、「母親の考え方に疑問を抱く」、「母親の感覚が理解できない」、「親の言動に振り回される」など、親との関わりの中で違和感を抱いている様子が窺えた一方で、「親の言動でダメになる時の準備を考える」、「何とか本人を母親に託せる状態」など、親の状況を見立てようとしていることが分かった。親子関係については、親子分離を巡る相談援助職の思いが浮き彫りになった。「上手に母子分離するか、無理に引き離すかのどちらか」の発言に見られるように、親子分離へのプロセスが多様であることが示唆されたが、「流れに任せるのがよい」のように、親子分離に向けてあまり積極的に働きかけていないのではないかと思われた。また、周囲が心配している家族や理解力の乏しい家族の存在が指摘され、家族や親族にもニーズがあることが明らかとなった。サービス提供者に関する思いとしては、ヘルパー事業所に関する発言が多く見られ、特に「信頼できない」「疑問を感じる」など、ホームヘルパーの資質に疑問を呈するものがあり、「ヘルパー教育が必要だ」と考えられていた。役所についても「現場感覚が地域包括支援センターと異なる」という声に表れているように、行政と実践現場の認識のズレに不満を抱いているようであった。「(居宅介護支援事業所の)介護支援専門員は親しか見していない」、「障害相談員は障害者本人しか見えない」などの語りに表れているように、他の相談援助職の視野の狭さに対する不満や不信も述べられていた。また障害相談員については、「気づきや動きが遅い」「焦りがない」「支援をゆっくり考える傾向」という声が聞かれた。介護が必要になった高齢者の切迫したニーズに向き合うことの多い高齢分野の相談援助職と、知的障害者のゆっくりしたペースを尊重し、長い目で支援を考えようと

する障害分野の相談援助職の違いが反映されている可能性がある。そのことが、障害福祉と高齢福祉の兼ね合いとして、「障害相談員と介護支援専門員の間に温度差がある」という発言に表れており、「障害と高齢の支援者相互の理解が必要」「お互いに変わっていくべき」という思いにも繋がっているのではないかと。さらに、地域の繋がりの希薄化が指摘される一方で、地域住民の発信の重要性や地域の持つ力を信じるという発言もあり、地域との関わりを通して様々なことを感じているようであった。そして、経済的支援についての言及も多く、地域の障害者や高齢者への相談支援において経済的支援が鍵を握る可能性も示唆された。支援の状況については、障害分野や近所からの情報が有効であること、支援者が入ると事態が動くこと、迅速な対応が求められる場合があること、地域の理解が必要であること、重層的な関わりで解決に向かうことなどが分かった。支援のあり方については、「皆で話し合う」「一緒に考える」「繋いだ後の連携が重要」などチームでの連携、「人権擁護の視点」「意思決定支援」などの支援の理念、「親子の将来を早い段階から考えるべき」などの先を見据えた支援、「自分たちは旗振り役・縁の下の方の力持ち」など自分たちの立ち位置への自覚などについての考えが多く語られていた。一方で、「相談が上がってこない」と動けない」「支援のステージに上がる迄に時間がかかる」「閉鎖した家族への介入が難しい」「自分には強制力がない」「網の目から落ちていくことが本当の問題」という発言に表れるように、地域における相談では住民としての障害者や高齢者に関わるという性格上、ニーズがあっても相談援助職のペースで一方向的に踏み込んだり進めたりできない難しさが浮き彫りとなった。また、「知的障害者本人の時間数だけでは不足」「母と子のサービスを合わせても

支援が足りない」という指摘があり、親子を支えるだけの十分な社会資源が用意されていない現状も明らかとなった。そして、「本人と親の利益相反・ニーズの板挟み」「制度の狭間で動けない」など、親と子、高齢福祉と障害福祉、という異なる対象・分野にまたがる支援におけるジレンマが示唆された。さらに「自らの力不足・対応を反省」「支援について自問する」など、自らの実践を振り返って悩んでいる状況も見えてきた。一方で、「親子の状態が心配」「繋いだ後にうまくいくよう願っている」など、相談援助職が数々の困難・悩み・疑問を抱きながらも、親子のウェルビーイングを気づかい、心を砕いていることが分かった。

## V. 考察

本調査は、筆者と関わりのある A 県内の地域包括支援センター及び居宅介護支援事業所に勤務する相談援助職を対象に実施したフォーカス・グループ・インタビュー (FGI) である。3名ずつの FGI を 2 回行ったが、1名は両方の FGI に参加したため、実質的には 5名が調査協力者であった。FGI という形を取ったことで、インタビューを進める中で、調査協力者が他の調査協力者の発言をきっかけに、新たな発言が生まれたのではないかと考える。反面、限られた時間の中での一人ひとりの発言は、個別インタビューに比較して少なかったと言える。また、地域が A 県内に限定されていることや、人数が 5名と少ないことから、本調査で語られた内容や明らかになったことには偏りがある可能性が考えられ、他地域の高齢分野の相談援助職に一般化することはできない。また、今回の調査は、当事者である中高年知的障害者や親たちからの視点が全く含まれておらず、今後の課題として取り組まなければならない。

反面、本調査によって得られた成果もいくつか

挙げることができる。まず、知的障害者本人に関しては、生活上の多様な課題が見えてきたことである。加齢に伴う健康状態の問題に加えて、サービス利用や社会参加がない、さらには障害者手帳や障害年金すら受けていないなど、知的障害者として認識されていない人たちが支援に繋がっていない人たちの存在が浮き彫りになった。知的障害者福祉の課題の一つと言える。

親に関しては、加齢に伴う機能低下やケア力の低下が起こっており、ケアに過重な負担を経験し、経済的な基盤が不十分な親もいる現状が明らかになった。また、そもそも親が子の障害を認識・理解できておらず、放置してきたと思われるケースもあった。これは「親子の高齢化」以前の問題であり、知的障害者本人がライフサイクルの早い段階で、本人及び親への支援を適切に行う必要がある。そして、制度を知らない、支援を受け入れず自分でケアを担おうとする親もいれば、反対に子のためにサービスを活用しようとする親もいる。親同士の交流のある人とない人、民生委員などに相談する人と支援者を避けようとする人、将来への準備を前向きに考えている人とそうでない人など、親の対応や行動も多様であった。さらに、自身の置かれている状況について困り感を持っている人と持っていない人、子に対して肯定的な感情を持つ人と否定的な感情を持つ人、サービス事業所や支援者を頼りに思う人と信頼できないと思う人など、親の思いについても一括りにできない多様性が窺える。相談支援の基本である「個別性」を見極めた関わりが求められるところである。さらに、ケアの対象としての子に愛着を抱いている親の存在が指摘されており、「ケア対象としての子への愛着」が、親子ともに高齢化してケアの継続が困難になる中、子を手放すことをためらう親を追い詰めるリスク要因になっている可能性があ

り、相談支援のアセスメントの段階で見逃してはならないであろう。

家族に関しては、健康問題や経済的問題など家族としての課題が見られた。他の家族メンバーの課題が悪影響を及ぼして「ケアの抱え込み」が続いたり、悪化したりしている家族があり、家族全体として孤立していたりしているケースもある。さらに、知的障害者本人や親にマイナスの影響を与えている親族の存在も指摘されており、相談支援においては、同居・別居に関わらず、親子の生活に影響を与えていると思われる家族や親族の存在も視野に入れることが望まれる。

関係機関については、高齢関係事業所と障害関係事業所のいずれに関しても、肯定的な発言と否定的な発言があり、一人ひとりの相談援助職がどのような関係機関とどのような接触を持ち、どのような印象を受けたかが、かなり異なるようであった。それに対して教育・療育機関については、制度を知らず親子の支援の視点が欠けているとの指摘があり、「中高年知的障害者と高齢の親の同居家族」の現状に影響を与えているであろう「乳幼児期・学齢期の知的障害児と親」への支援の課題を映し出しているのではないと思われる。先にも述べたとおり、知的障害児・者と親のライフサイクルを見通した相談支援や「親子に対する支援」が、乳幼児期・児童期から行われることが不可欠であろう。

社会資源に関しては、障害分野の相談支援体制が確立されてきたことが評価できる反面、入所サービスと在宅サービスが併用できないことや、65歳を境に障害福祉から介護保険に移行するなど、制度設計上の課題が確認された。この問題は、障害者相談支援従事者への聞き取り調査においても指摘されており（植戸 2018）、相談支援の実践現場だけでは解決することができない、マクロ・

レベルの課題として取り組んでいく必要がある。

地域包括支援センターについては、幅広い対応をしていることが分かった。虐待通報を受けての家庭訪問をはじめ、本来の支援対象である高齢者のみならず、知的障害者本人や他の家族メンバーに対する直接的な働きかけ、行政や障害分野の相談員を巻き込んで支援体制を構築することを心がけているようであった。地域包括支援センターが連携する先としては、障害分野及び高齢分野の各事業所・相談員の他、行政の各担当部署、さらに地域住民なども挙がっていたが、連携がきちんと取れていないケースもあることが指摘されていた。また、相談経路としては、他機関・他職種から地域包括支援センターに入ってくるケースと、地域包括支援センターから他機関に相談につなぐケースがあり、地域包括支援センターが多様な機関の繋ぎ目となっていることが推測される。今回の調査に協力してくれた地域包括支援センターの相談援助職はこのような動きができていたようであるが、どの地域包括支援センターにおいても、このような役割が果たせるよう、地域包括支援センターの相談援助職に対する啓発や研修が望まれるところである。

相談援助職自身に関しては、他のどの項目よりも多くの語りが得られた。知的障害者本人に対しては相談に乗って制度やサービスに繋ぐことを行い、親に対してもサービスや支援に関する情報提供や助言、子による暴力から守る権利擁護、将来への準備を促す支援を提供しながら、親子を一体的に支援する姿勢を持っているようであった。家族への支援としては、生活面と経済面の基盤づくりを行い、他機関・他職種と繋がるための働きかけや、自身の力量を高めるための努力もしていることが窺えた。また、知的障害者本人に対して関心を寄せながら関わり、親に対する違和感を持ち

ながらも、親の状況を見極める姿勢を持っていたが、親子分離についてはあまり積極的な働きかけが行われていないようであった。障害者相談支援従事者に対する聞き取り調査の結果からは、支援者の関わり方によってケアの抱え込みが解消され、親子分離が促進されることが示唆されており(植戸 2013)、高齢分野の相談援助職も、適切な親子分離のための支援を意識的に行うことが求められるであろう。その他、行政との認識のズレがあること、障害福祉分野は高齢福祉分野に比べて相談支援のペースがゆっくりしていることが指摘される一方で、このようなギャップを埋めるためには障害分野と高齢分野が相互理解を深めることが大切であると考えられていた。地域のつながりが希薄化している現状を憂いつつも、やはり地域の力を信じようという姿勢も見られた。また、地域における相談援助職としての自分たちの役割を「縁の下の力持ち」と位置づけ、本人・家族の生活に踏み込めないもどかしさを抱えつつも、本人・家族や住民を中心に置き、人権擁護や意思決定支援といった理念を大切にしていた。一方で、知的障害者本人と家族の板挟み、社会資源の不足、制度の狭間、自らの力不足など、多くの困難や悩みを経験している様子も窺えた。急速に高齢化が進む時代にあって、また地域資源が乏しい現状の中、地域で高齢者と家族を支える役割を与えられた地域包括支援センターや居宅介護支援事業所の相談援助職がさまざまな困難に直面していることは明らかであり、相談援助職に対するスーパービジョン・研修・支援にも取り組む必要がある。

## VI. まとめ

今回のインタビュー調査によって、高齢分野の相談援助職が「中高年知的障害者と高齢の親の同居家族」に対して行っている相談支援の実態や課

題が見えてきた。一般的に地域包括支援センターや居宅介護支援事業所など高齢分野の相談援助職は、「支援や介護が必要になった高齢者と、その高齢者をケアする家族」を支援の対象としている。しかし、本研究が焦点を当ててきたのは、同居する中高年知的障害者をケアしてきた親が、そのケア役割を担いつつ、自身が要支援・要介護になった場合の相談支援である。つまり、ケアしなければならない家族（この場合は知的障害のある成人子）がおり、自身もケアが必要な高齢者をどう支援するかという新たな課題であり、実践面・政策面・研究面のそれぞれにおいて、解決に向けた取り組みが必要となる。それによって、知的障害者本人の地域における安定した豊かな生活が実現できるであろう。今後は、障害分野及び高齢分野の相談援助の質の向上といったミクロ・レベルの対策、地域の社会資源の充実と相談支援における障害分野と高齢分野の連携の強化といったメゾ・レベルの対策、さらに障害福祉施策と高齢福祉施策の充実と有機的な連携といったマクロ・レベルの対策が求められる。

## 謝辞

今回のインタビュー調査に協力して下さった高齢分野の相談援助職の皆様に、心より感謝申し上げます。

## 付記

本研究は、平成28～30年度科学研究費助成事業（基盤研究（C））（課題番号：16K04230）、研究代表者：植戸貴子）による研究の成果の一部である。

## 【参考・引用文献】

・井土睦雄（2013）「福祉権利の分断性と孤立死：知的障害者・家族の孤立死問題をふまえて」『四

天王寺大学大学院研究論集』7, 18-38

- ・石渡和実（2000）「障害者福祉における知的障害者への高齢化対応：『地域生活支援』をめざす行政施策と施設実践」『発達障害研究』22（2）, 87-95
- ・国立社会保障・人口問題研究所（2015）「第7回世帯動態調査」
- ・厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部（2018）「平成28年生活のしづらさなどに関する調査（全国在宅障害児・者実態調査）結果」
- ・三原博光・松本耕二・豊山大和（2007）「知的障害者の老後に対する親たちの不安に関する調査」『人間と科学 県立広島大学保健福祉学部誌』7（1）, 207-214
- ・内閣府（2018）「平成30年版高齢社会白書」
- ・内閣府（2018）「平成30年版障害者白書」
- ・中根成寿（2007）「コミュニティソーシャルワークの視点から『障害者家族』を捉える：障害者家族特性に配慮した支援に向けて」『福祉社会研究』7, 37-48
- ・夏堀撰（2007）「戦後における『親による障害児者殺し』事件の検討」『社会福祉学』48（1）, 42-54
- ・小川勝彦（2013）「重度知的障害者の高齢化と医療福祉的問題」『障害者問題研究』41（1）, 18-26
- ・佐藤郁哉（2011）「質的データ分析法：原理・方法・実践」新曜社
- ・高林秀明（2013）「知的障害者と家族の老いの暮らし：その社会的地位と社会保障の課題」『障害者問題研究』41（1）, 10-17
- ・谷口泰司（2014）「高齢知的障害者に対する地域生活を巡る諸問題：各種実態調査および地域生活支援諸施策の検証からの一考察」『発達障害研究』36（2）, 120-128

- 田村恵一 (2007) 「障老介護についての一考察」 『子大学健康福祉学部紀要』 10, 1-19  
『淑徳短期大学研究紀要』 46, 19-31
- 辻村あずさ (2015) 「社会福祉士における『高齢の親と知的障がいのある成人の子から構成される世帯』への支援に関する調査研究：横浜市の地域包括支援センターの場合」 『ソーシャルワーク実践研究』 1, 82-93
- 植田章 (2010) 「知的障害のある人の加齢と地域生活支援の実践的課題：『知的障害のある人（壮年期・高齢期）の健康と生活に関する調査』から」 『佛教大学社会福祉学部論集』 6, 19-32
- 上原久 (2013) 「軽度知的障害がある息子と同居する高齢者の支援」 『ケアマネジャー』 15 (9), 64-72
- 上原久 (2014) 「認知症の父親と暮らす知的障害をもつ男性の支援：事例情報の質と支援者の姿勢」 『ケアマネジャー』 16 (5), 58-66
- 植戸貴子 (2013) 「知的障害者の地域生活継続のための先駆的相談支援実践：障害者相談支援事業所に対する聞き取り調査から」 『神戸女子大学健康福祉学部紀要』 6, 15-28
- 植戸貴子 (2015) 「知的障害児・者の親によるケアの現状と課題：親の会の会員に対するアンケート調査から」 『神戸女子大学健康福祉学部紀要』 7, 23-37
- 植戸貴子 (2016) 「知的障害児・者の親によるケアから社会的ケアへの移行：親へのアンケート調査から」 『神戸女子大学健康福祉学部紀要』 8, 1-27
- 植戸貴子 (2017) 「知的障害者及び親の高齢化：現状と課題認識」 障害学会第14回大会ポスター報告
- 植戸貴子 (2018) 「中高年知的障害者と高齢の親の同居家族に対する相談支援：障害者相談支援事業所に対する聞き取り調査から」 『神戸女